

## 被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度の作成

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 大津 絵美子

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 小川 俊樹

The development of a scale of preoccupation tendencies for persecutory ideation

Emiko Otsu and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, Japan*)

The purpose of this study is to develop an evaluation scale of preoccupation tendencies for persecutory ideation. In a preliminary survey, we used a free description method and collected a number of items related to daily life episodes of persecutory thinking. These items were evaluated for their preoccupation tendencies and their frequencies. A factor analysis of data collected from 385 college students revealed a single structure involving 15 items on the scale. The alpha coefficient was high, confirming its internal consistency. The data indicates that the majority of students experience preoccupations towards persecutory ideation, and that there is a weak but significant correlation between this preoccupation tendency and the frequencies of persecutory ideation. These findings highlight the importance of studies that distinguish between preoccupations for persecutory ideation and their frequencies.

**Key words:** persecutory ideation, preoccupation, questionnaire, adolescents

### 問題と目的

日常生活における他者との関りの中では、明らかに危害を被ったわけではなくても、他者の言動から自分に対する嫌悪や悪意などの否定的な意図を感じ、被害的に思い込むことがある。このような体験は世間一般で幅広く見られ (Ellet, Lopes & Chadwick, 2003)、近年、研究領域においても研究者の関心を集めている (金子, 2001)。一般青年における被害的な観念<sup>1)</sup>に関する研究は、“妄想様観念”、“攻撃性”、“自己理論”の3つの文脈において取り上げられている。

妄想様観念<sup>2)</sup>の研究は、精神病理学の分野において、統合失調症患者の妄想の理解を目的として行われ、主に、情報収集における推論バイアス (need for closure and jump to conclusion bias) や、帰属バイアス (self-serving bias) に着目し検討されている。妄想や妄想様観念は、構造化面接法や質問紙

法を用いて測定されるが (Huq, Gerty & Hemsley, 1988; Kiderman & Bentall, 1997)、近年では一般健常者を対象とした研究も少なくない (Linney,

- 1) 一般青年を対象に検討された先行研究では“パラノイア”“パラノイド認知”“被害的観念”“被害妄想的観念”など、研究者によって様々な表現が用いられている。本研究では、先行研究におけるこれらの関連概念を“被害的な観念”と統一して表現する。
- 2) Jaspers (1913 西丸訳 1971) は統合失調症者の妄想様観念や真正妄想は了解不能であるが、健常者における正常な信念や支配観念の類は了解可能であるとして、一般健常者が抱く被害的な観念とは質的に異なるものとして明確に区別した。しかし、近年、精神病患者の妄想から一般健常者の観念を連続するものとして捉えるスペクトラム説の立場を採用し研究する者が現れ始めており、DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994 高橋ら訳 1996) では、妄想様観念 (paranoid ideation) を“妄想ほどの強さはない観念”と定義している。

Peters & Ayton, 1998)。日本でも、丹野・石垣・杉浦 (2000) が臨床群だけでなく一般健常者への適用が可能な尺度として、妄想的観念チェックリスト (Delusional Ideation Checklist: DICL) を作成している。DICL は主題ごとに妄想的観念が測定され、被害観念には「神様や霊などが、私の行動を邪魔している、という感じ」「だれかに操られているように感じられる体験」のような項目が含まれる。しかし、これらは一般青年が日常的な他者とのやりとりの中で体験する被害的な思い込みとは質の異なるものと考えられる。また、DICL では被害的な観念を抱く対象が漠然としている。一方、一般青年の被害的な観念は、日常場面において友達など身近な他者の言動を目の当たりにし、「嫌われている」「わざと嫌がることをされた」などと思いつく現象である。加えて、これらは一般健常者の観念から精神病患者の妄想や妄想様観念を連続線上で捉えるパラノイド・スペクトラムの考え方を採用したアナログ研究である。その目的は研究で得られた知見を臨床群の妄想症状に応用することにあり、近年広がりを見せているが、臨床群と一般健常群との結果が必ずしも一致しないとの報告や (e.g. Linney, Peters, Ayton & Peter, 1998)、スペクトラム説には慎重になるべきであるとの意見 (Ellet, Lopes & Chadwick, 2003) もある。このように、妄想様観念における被害的な観念は、一般青年が日常生活の中で抱く一時的な思い込みの現象との相違があり、本研究とは区別される。

他方、攻撃性研究における被害的な観念は、攻撃性の高い者に特徴的な、他者の行動に敵意や悪意の意図を邪推しやすい対人認知として注目され、怒りや報復的な攻撃行動を喚起させる要因となることが報告されている (滝村, 1991; 大淵・小倉, 1984)。攻撃性研究では、被害的な観念は攻撃性の一部として扱われ、測定には攻撃性に関する尺度 (大淵, 1993) が用いられる。また、自己理論研究では、自分が他者の注意や批判の標的になっていると思いつく傾向の過度であることを「自己標的バイアス (self-as-target bias)」と呼び、他者の言動を何でも自分に関連づけるという傾向を測定する尺度として、パラノイド尺度 (Fenigstein & Vanable, 1992) や、自己関連づけ尺度 (金子, 2000) が開発され、公的自己意識との関連が示されている。しかし、被害的な観念は、社会不安との混同を避けるためにも、他者の背後に敵意や悪意を感じるという点が重要である (Ellet, Lopes & Chadwick, 2003; Freeman & Garety, 2000)、自己理論研究における被害的な観念には、邪推という側面が欠けている。

加えて、パラノイド尺度には、社会不安だけでなく抑うつ状態との区別も困難であるという指摘もある (Freeman, Garety, Bebbington, Slater, Kuipers, Fowler, Green, Jordan & Ray, 2005)。このように、被害的な観念は、攻撃性研究においては邪推という敵意的な認知傾向に焦点が当てられ、自己理論研究では、自己が他者からどのように見られているかを気にしすぎるといふ自意識過剰として取り上げられており、それぞれ被害的な観念という現象の側面が強調され検討されている。また、金子 (1999) は、猜疑心と自己関係づけの両方の概念を含んだ尺度として被害妄想的心性尺度を作成しているが、ここでの猜疑心とは、性格傾向としての警戒心や不信感の高さを指しており、他者の言動を目の当たりにして生じるものではない。

以上を受け、先行する関連研究の概観からは、一般青年が日常生活の中で体験する被害的な観念を総合的に捉えることが困難であるという問題点が指摘される。そこで、本研究では、「危害を加えられたという明らかな証拠は無いが、他者の言動から自分に対する嫌悪感や悪意などの否定的な意図を感じ取り、自分が被害者であると思いつくこと」を「被害的思い込み」と定義し検討を行う。ここで、本研究における被害的思い込みについて以下の3点を確認する。まず、研究の対象を一般大学生とする。それは、多くの青年が被害的思い込みを体験することが報告されており (Ellet, Lopes & Chadwick, 2003)、特に大学生においてその傾向が高まることが示されているためである (金子, 2000)。次に、全く見知らぬ他者に対して思い込みを抱く場合や、思い込みの内容が他者の自分に対する否定的な意図を含まない場合を除外する。これは先行研究 (Ellet, Lopes & Chadwick, 2003; Freeman & Garety, 2000) によって指摘される、社会不安や単なる過敏性との区別のためである。第三に、人々が日常生活において経験する被害は、身体的被害や物質的な被害よりも心理的被害がその大部分であり (大淵, 1982)、被害の程度や有無は実際の物質的な被害の程度や有無に必ずしも対応しないことが示されている (Fenigstein, 1984; 大淵・小倉, 1984)。よって、被害的思い込みでは、実際に否定的な意図が向けられているかという客観的正誤や、現実的な危害の有無及び物理的な被害の程度よりも、他者から否定的な意図を向けられているのではないかと感じ、被害的に扱われた、自分は被害者であると思いつくという主観を重視する。

また、先行研究からは、被害的な観念が主体に精神的苦痛や思考の占有をもたらすことや (Peters,

Joseph & Garety, 1999; Ellet, Lopes & Chadwick, 2003), ストレスとの関連 (Freeman et al, 2005), そして対人関係において不必要なトラブルを生じやすいこと (滝村, 1991) が報告されている。これらは被害的思い込みに、強くとらわれることによって生じる社会適応や精神的健康への悪影響であると考えられ、被害的思い込みへのとらわれに関する知見が求められる。しかしながら、これまでの研究は被害的な観念の発生過程、つまり被害的な観念の抱きやすさという体験頻度に研究者の関心が集中し、被害的思い込みへのとらわれやすさという維持の程度 (以下、「とらわれやすさ」とする) の検討はほとんど行われていない。そのため、とらわれやすさを測定する尺度は見当らない。また、被害的思い込みの体験頻度と、とらわれやすさの関係についても未検討であり、両者はどのような関係にあるのが不明確である。よって、本研究では被害的思い込みへのとらわれやすさを測定する尺度を作成することを目的とする。加えて、被害的思い込みについて、それへのとらわれやすさと共に体験頻度 (抱きやすさ) についても測定を行い、両者の関係を検討する。とらわれについては、Perters, Joseph & Garety (1999) を受け、精神的な苦痛度と心的占有度の2点から捉え、本研究において被害的思い込みへの「とらわれ」とは、主体が被害的思い込みを抱いた際に、それによって「苦痛を感じ、思い出したり考えたりするなどして気にし続ける程度」とする。

## 予備調査

予備調査では、一般大学生が日常生活において体験する被害的思い込みに関する項目を抽出することを目的とする。

### 方法

**調査対象者および調査時期** 対象は、茨城県の国立大学の大学生136名のうち、回答に不備のみられるもの12名を除く124名 (男性58名, 女性66名)。対象者の平均年齢は20.27±1.47歳, 調査時期は2005年7月であった。

**手続きおよび倫理的配慮** 調査は無記名式の質問紙法であり、大学の講義時間中に集団で実施され、回答終了後にその場で回収された。調査では、本調査の主旨を説明し、質問の回答には正解がないこと、本調査が自由意志による参加であり回等の拒否や中断が可能であり、そのことによる不利益を被ることはないこと、個人情報保護について紙面 (フェイスシート) および口頭で説明した。その上で、調査に参加する意志がある場合には所定の欄へ

同意を示すサインを記入するよう求めた。同意が確認された場合には、フェイスシートに必要事項 (所属・学年・年齢・性別) を記入し、これまでに体験したことのある被害的思い込みについて、どのような状況でどのような思いを抱いたかという被害的思い込みのエピソードについて、自由記述形式で回答するよう求めた。

### 結果と考察

1人の調査対象者が複数のエピソードを記述している場合もあり、分析対象となった記述は計137件であった。得られた回答を臨床心理学を専攻する大学院生4名によりKJ法 (川喜田, 1967) による分類を行い、22項目を抽出した。分類は、どのような場面で被害的思い込みを抱いたかという被害的思い込みを体験する状況と、その場面でどのように思い込んだのかという思い込みの内容の2段階により行われ、両者を組合わせて項目を作成した。組み合わせは「嫌われた」「自分との関りを拒否された」などの「被害的思い込みの内容」の各カテゴリーを代表すると考えられる項目を抽出し、「会話」や「メールのやりとり場面」などの「被害的思い込みを体験する状況」を付加する形式で行われた。その際、度数の多い記述を優先することや、被調査者の回答で用いられた表現を再現するよう配慮した。各項目の内容的妥当性は臨床心理学専攻の大学院生4名および臨床心理学を専門とする大学教員1名によって確認された。

## 本調査

本調査では、予備調査で作成された被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度を施行し、得られた回答を項目分析、探索的因子分析を行い、その構造および信頼性の検討を行う。

### 方法

**調査対象者および調査時期** 対象は関東圏の国立大学、公立大学および私立大学の大学生405名のうち、回答に不備の見られる者を除く385名 (男性151名, 女性234名)。被調査者の平均年齢は19.78±1.57歳であり、調査時期は2005年10月であった。

**手続き** 調査内容は、予備調査において抽出された被害的思い込み尺度22項目である。これは各項目について、体験頻度、苦痛度、心的占有度の3点を尋ねる尺度である。具体的には、体験頻度において「どのくらい頻繁に体験しますか」を「1. 一度も体験したことがない」～「6. よくある」の6件法たずね、その項目の示す体験をしたことがある場合

(「2. ごくまれにある」以上に該当する場合)には、続けて苦痛度と心的占有度についても回答するよう求めた。体験したことがない場合(体験頻度の「1. 一度も体験したことがない」に該当する場合)は、苦痛度と心的占有度には回答はせず次の項目に進むよう教示を与えた。苦痛度では「その考えを抱いたり体験した時、あなたはどのくらい嫌な感じ(苦痛)がするか」を問い、「1. まったく苦痛でない」～「6. 非常に苦痛である」の6件法で回答を求めた。心的占有度では「その体験や考えをあなたがどのくらいの間(期間)気にし続けるか」を問い、「1. まったく気にしない」～「6. 非常に長い間気にする」の6件法で回答を求めた。なお、ここで「気にし続ける」とは、そのことを考え続けたり何かを機に思い出すなど、頭から離れないこと」を指す旨を記載した。なお、倫理的配慮は予備調査にならった。

### 結果と考察

**項目分析** 各項目の体験頻度、苦痛度、心的占有度について平均値と標準偏差を算出したところ、体験頻度において、項目4「少し離れたところで固まって話している友人たちと目が合うと、その人達は自分を批判しているのではないかと思う」、項目8「自分が話をしている途中で友達が席を立つと、いかげんに扱われているように思う」、項目22「友達に、自分との約束を直前になって突然キャンセルされると、避けられているのかと思う」において床効果が認められた。苦痛度では、項目14「友達との遊びや飲み会などが思っていたよりも早く終わると、自分とはあまり一緒にいたくなかったのかなと思う」、心的占有度では項目14と項目19「以前自分が話したことを友達が覚えていないと、その友達は自分に興味がないのかなと思う」、項目22において床効果が見られた。これら5項目は分布に偏りがあり、一部の対象者にのみ被害的に感じ取られ、苦痛や心的占有が生じるものと考えられる。よって青年一般が幅広く体験する被害的思い込みとしては適切でないと判断し、削除の対象とした。次に、項目間相関係数を算出したところ、項目7と項目13、項目11と項目16の間において相関係数が.70以上であった。これらは項目内容の類似性が高く、重複して被害的なエピソードについて尋ねることとなるため、分布の安定性を参考に、項目13「ひそひそ話をしている友達がいると、自分の悪口を言われているのではないかと思う」と項目16「友達からメールの返信がなかなか返ってこないとき、自分は大事にさ

れていないのかと思う」を削除した。以上をもって採用された15項目をこれ以降の分析の対象とした。

**被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度の得点化** とらわれやすさの得点化にあたり、体験頻度、苦痛度、心的占有度の各次元の関係を検討するため、相関係数を算出した(Table 1)。その結果、苦痛度と心的占有度の相関は $r = .88$  ( $p < .01$ )と非常に高い値を示していた。続いて、苦痛度は高いが心的占有度は低い者や、苦痛度は低いが心的占有度は高い者の存在を確認するため、クラスター分析(ユークリッド距離、ウォード法)を行った。その結果、苦痛度も心的占有度も低いクラスターと、苦痛度も心的占有度も高いという2つのクラスターに分類され、上記のようなクラスターは見られなかった。そこで、被害的思い込みへのとらわれやすさの項目得点は、各項目の苦痛度の得点と心的占有度を加算し算出した。

**尺度の因子構造および信頼性の検討** 因子分析(最尤法・Promax回転)の結果、固有値の減衰状況から明らかな1因子構造が認められた。そこで、因子数を1に設定し再度因子分析(最尤法)を行った結果、因子負荷量は15項目全てにおいて十分な値が得られた。また、I-T相関係数も.47～.72と有意( $r < .01$ )な正の相関を示していた(Table 2)。次に、信頼性の検討のためにCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、1因子15項目の $\alpha$ 係数は.92と高い数値が得られ、十分な内的整合性が確認された。尺度得点は、全15項目における、とらわれ得点の合計を被害的思い込みの体験数(体験頻度において「2. ごくまれにある」以上に回答した項目の数)で除算したものを尺度得点とした。尺度得点の平均は4.53 ( $SD = 1.36$ )、範囲は7.80で、性差は認められなかった( $t = 1.87, n.s.$ )。この結果は、一般青年における被害的な観念の体験には男女差がないという先行研究の知見(Freeman et al, 2005; Perters, Joseph, & Garety, 1999)と一致している。攻撃性研究における被害的な観念は、邪推しやすさに焦点を当てているが、このような敵意的な対人認知は、男子の方が女子よりもその傾向が高いことが示されている(滝村, 1991)。また、自己理論研究

Table 1 被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度の各次元間の相関

	体験頻度	苦痛度	心的占有度
体験頻度			
苦痛度		.32**	.34**
心的占有度			.88**

\*\* $p < .01$

では、被害的な観念の自意識過剰という面が着目され検討されているが、女子においてその傾向が強いことが報告されている（金子，2000）。このことは、被害的思い込みという現象を、総合的に捉えることの重要性を示していると言えるだろう。

### まとめと今後の課題

本研究は、一般青年の日常的な被害的な思い込みへのとらわれやすさを測定する尺度を作成することを目的として行われた。被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度は、因子分析の結果、1因子構造が明らかになり、内容的妥当性が確認され、充分な内的整合性が認められた。既存の尺度は被害的な観念の一部に焦点を当てており、総合的に捉えることが困難であった。本尺度は大学生を対象に予備調査を实

施し、自由記述により得られた回答から項目を抽出しており、一般青年の日常的な体験に即したものと言える。また、先行研究の知見（Ellet et al, 2003）をもとに、未検討であったとらわれに着目し、苦痛度と心的占有度によってとらわれやすさを定義した。本研究では、被害的思い込みについて、それへのとらわれやすさと共に、体験頻度（抱きやすさ）についても測定を行った。その結果、被害的思い込みは、それへのとらわれやすさという維持の傾向と、抱きやすさという発生の傾向が、関係はあるものの低いことが示された。このことから、両者はある程度独立した傾向であり、体験頻度とは別に、とらわれやすさについての検討を行うことが重要であると考えられる。

以下、今後の課題について検討を加える。まず、本尺度は内容的妥当性の確認にとどまっている。今

Table 2 被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度の因子分析結果（最尤法）

	項目	負荷量	I-T 相関係数	とらわれ得点
17	会話の際、自分の話すことに対する友達の反応が薄いと、自分は嫌われているのではないかと思う	.76	.72	4.22 (1.85)
18	自分の誘いが断られると、相手の友達は何か別の理由を口にしていても避けられているように思う	.73	.64	4.03 (1.95)
9	何かを決める話し合いの場で、自分の提案や発言に対する友達の反応が鈍いと、自分はいやがられているのかなと思う	.72	.64	4.63 (2.03)
6	友達のことを思って申し出たことが断られると、避けられているのではないかと思う	.72	.68	4.48 (1.97)
7	他の友達の会話の中に自分に関連する言葉を耳にすると、何か自分のことを悪く言っているのではないかと思う	.71	.69	4.78 (1.93)
5	友達からのメールの返信がそっけないと、自分は嫌われているのではないかと思う	.68	.72	4.68 (1.95)
21	比較的仲の良い友達が相談事などの大事な話を自分にはせず他の人にするのを見ると、あえて自分にはしないのではないかと思う	.66	.67	4.65 (2.04)
20	自分のほうを見て笑っている友達と目が合うと、自分のことが馬鹿にされているのではないかと思う	.62	.63	4.72 (2.30)
2	友達と目が合ったのに挨拶などの反応が何もないうち、無視されたように思う	.60	.58	4.60 (1.83)
11	友達に送ったメールへの返信がなかなかこない、無視されているのではないかと思う	.59	.59	4.56 (2.18)
15	友達が自分の知らない話題で盛り上がっていると、自分がのけ者にされたように思う	.59	.62	4.14 (1.78)
3	会話をしているときに友達が他の人のほうばかり見ていると、自分には関心がないのかと思う	.59	.62	4.51 (1.82)
12	一緒に行動することの多い友人達が自分の知らないうちに遊んでいたことを後から知った時、実は自分は嫌われているのではないかと思う	.56	.54	4.96 (2.50)
10	会話の中で友達が「やっぱり言わないで」と何か言いかけたことを途中で止めると、自分に対して何か良くないことを考えていたのではないかと思う	.53	.58	4.58 (2.12)
1	友達から遊びや飲み会などの知らせが自分にこないとき、自分が仲間はずれにされたように思う	.46	.47	5.43 (2.02)
	負荷量平方和 (%)	41.1		

とらわれ得点の上段は平均値、下段の（ ）内は標準偏差を示す

後は基準関連妥当性など概念的な検討を加える必要がある。信頼性についても、再検査信頼性など安定性の確認が必要であろう。次に、被害的思い込みでは被害を被っているという主体の主観を重視しているため、実際には悪意や嫌悪感を向けられていない場合と、いじめのような悪質な扱いを実際に受けている場合とが同様に扱われる。被害的な観念は精神的な不健康や社会的不適応との関連が報告されており(滝村, 1991; Freeman et al, 2005), とらわれが極端な場合には、臨床的な介入が必要となる場合も考えられる。よって、普段の生活の中で抱く一時的な勘違いと、実際的な被害によるものとの区別には慎重になるべきであろう。

最後に、被害的思い込みへのとらわれやすさについて、本研究では苦痛度と心的占有度の二次元の関係は非常に強く、苦痛度は高いが心的占有度は低く比較的短期間で解消する者や、苦痛度は低いが心的占有度が高く長期にわたり気にし続ける者の存在は確認されなかった。被害的思い込みによって苦痛を強く感じるほど被害的思い込みに心や思考が支配され、気にし続けるからこそもますます苦痛に感じられるというように、苦痛度と心的占有度は双方向的な関係にあると推測される。今後は、とらわれのメカニズムや、とらわれを規定する要因について詳細な検討を加える必要があると考えられる。

### 引用文献

- American Psychiatric Association (1987) Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 4th ed. Washington, D.C: American Psychiatric Association.  
(高橋 三郎・大野 裕・染谷 俊幸 訳 1996 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Ellet, L.B., Lopes, B.M. & Chadwick, P. (2003) Paranoia in a non-clinical population of clinical population of college students. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 191, 425-430.
- Fenigstein, A. (1984) Self-consciousness and the overperception of self as a target. *Journal of Personality & Social Psychology*, 47, 860-870.
- Fenigstein, A. & Vanable, P.A. (1992) Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality & Social Psychology*, 62, 129-138.
- Freeman, D. & Garety, P.A. (2000) Comments on the content of persecutory delusions: Does the definition need clarification? *British Journal of Clinical Psychology*, 39, 407-414.
- Freeman, D. Dunn, G., Garety, P.A., Bebbington, P., Slater, M., Kuipers, E., Fowler, D., Green, C., Jordan, J. & Ray, K. (2005) The psychology of persecutory ideation I: A questionnaire survey. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 193, 302-309.
- Huq, S.F., Grety, P.A. & Hemsley, D.R. (1988) Probabilistic judgements in deluded and non-deluded subjects quarterly. *Journal of Journal of Experimental Psychology*, 40, 801-812.
- 川喜多二郎 (1967) 発想法 - 創造性開発のために - 中公新書 中央公論社 (Kawakia, J.)
- 金子一史 (1999) 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について 性格心理学研究, 8, 12-22.
- 金子一史 (2001) 被害的観念および妄想に関する研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 48, 163-173.
- Kiderman, P. & Bentall, R.P. (1997) Causal attributions in paranoia and depression: Internal, personal, and situational attributions for negative events. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 341-345.
- Linney, Y.M., Peters, E.R. & Ayton, P. (1998) Reasoning biases in delusion-prone individuals. *British Journal of Clinical Psychology*, 37, 285-302.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1984) 怒りの経験 (1) - Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況 - 犯罪心理学研究, 22, 15-35.
- 大淵憲一 (1993) 他人を傷つける心 サイエンス社
- Perters, E.R., Joseph, S.A. & Garety, P.A. (1999) Measuring delusional ideation in the normal population: Introducing the PDI (Perters et al. Delusions Inventory). *Schizophrenia Bulletin*, 25, 553-576.
- 滝村美保子 (1991) パラノイド傾向と攻撃行動 - パラノイド質問紙作成の試み及びパラノイド傾向と非行との関連性の検討 - 応用社会学研究 東京国際大学大学院社会学研究科, 61-79.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義彦 (2000) 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成 心理学研究, 71, 397-386.

(受稿 3月23日: 受理 4月27日)